

第3節 大分川中流域の弥生時代から古墳時代初頭の集落変遷

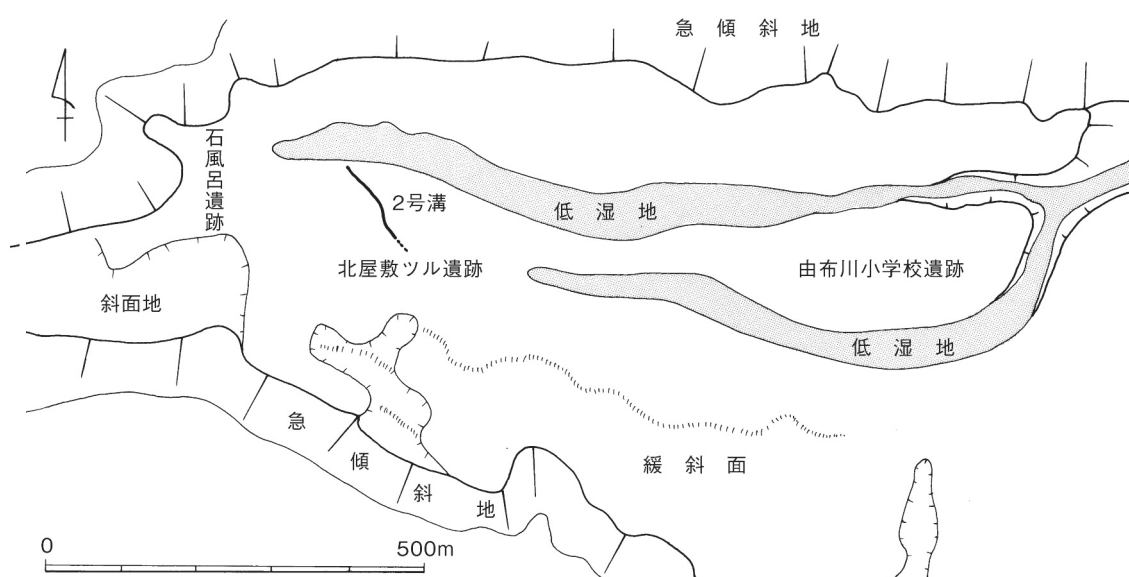
北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡（以下3遺跡と記述する場合もある）は由布岳・黒岳に源を発し別府湾に注ぐ大分川流域にある。大分川は水源に近い由布院盆地や阿蘇野を上流域、河口周辺である大分平野とその周辺を下流域とするならば、3遺跡のある地域は、下流域に接する中流域と言える。地形的に見ると、上流域は由布院盆地があるものの、大半は急峻な溪谷を形成している。これに対し、下流域は比較的広い沖積平野を形成するものの、洪積世の丘陵が分断する。こうした中で、3遺跡のある地域は、沖積平野はないものの、3遺跡が立地する洪積世台地や河岸段丘などで構成される比較的平坦な地形を形成している。

こうした地形の中に、縄文時代末から弥生時代、そして古墳時代までの遺跡が展開しており、幾つもの遺跡が発掘調査されている。そこで、その調査成果を基に、この地域での遺跡の動態－集落変遷－を考えてみる。

縄文時代の末に北部九州の玄界灘に面した唐津平野や福岡平野に朝鮮半島から本格的な水稻栽培が伝わる。この地域のほぼ同時期である刻目突帯文を出土する遺跡は、大分市植田市遺跡⁵・荏隈杉下遺跡¹²・玉沢地区条里跡遺跡群²・反田地区¹³（以下玉沢二反田地区遺跡）、由布市挾間町下黒野遺跡¹⁴・北原遺跡¹がある。このうち植田市遺跡・荏隈杉下遺跡・玉沢二反田地区遺跡は沖積地に立地し、稲作栽培も想定できるが、下黒野遺跡・北原遺跡は標高約100mの洪積性台地上に立地するため、その可能性は低い。しかも北原遺跡では扁平打製石斧が一定量出土しており、九州の縄文時代晩期の遺物組成の特徴を継承していると言える。また、沖積地立地遺跡の荏隈杉下遺跡・玉沢二反田地区遺跡にも扁平打製石斧が含まれ、こうした地形に立地する集落も同様の可能性が高い。

すなわちこの地域の弥生時代の始まりの頃の状況は、沖積地に立地する動きはみられるものの、荏隈杉下遺跡縄文時代晩期の生業形態を継続しているものと考えられる。それでも荏隈杉下遺跡以外の4ヶ所の遺跡から出土した土器の組成の中に、縄文晩期の土器群には見ることができず、弥生時代の特徴である壺形土器が含まれており、新しい時代の波を確実に受けている。

この地域で本格的に稲作農耕を開始したと言えるのは弥生時代前期後半からである。この時期の遺跡は、大分川や小河川が形成した沖積地内の微高地や、沖積地を見下ろす丘陵上に立地する。前者は大分川の下流域の大分市下郡遺跡群や別府湾に注ぐ住吉川沿いの大分市田室東遺跡⁸、後者は



第121図 北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡周辺の地形（1/1000）

第3節 大分川中流域の弥生時代から古墳時代初頭の集落変遷

雄城台遺跡 大分市雄城台遺跡・守岡遺跡がある。

守岡遺跡 これらの遺跡からは、この時期の壺形土器や甕形土器の他、袋状貯蔵穴など北部九州の弥生時代前期の集落を構成する遺構が検出されている。また、田室東遺跡からは収穫具である石包丁や木製品加工用と考えられている小型扁平片刃石斧等が出土している。さらに大分市下郡桑苗遺跡¹⁵からは弥生時代前期末から中期初頭にかけての木製の鋤や鍬が多量に出土している。こうした遺物の存在は集落周辺の低湿地での稲作開始を物語っていると言える。

城南遺跡 このようにして、朝鮮半島から北部九州に伝播した稲作栽培は、弥生時代前期末には大分川下流域やその周辺に確実に伝わっている。その後、弥生時代中期後半については大分川流域で良好な調査例に乏しいが、おそらく弥生時代前期末から中期初頭の状況を継承し、稲作面積の拡大を図るなど、生産性の向上を目指し、水田開発を行っていたことが想像でき、一部は城南遺跡¹⁶のように丘陵上でも確認できる。

こうした、状況が大きく変化するのが弥生時代後期である。大分県を中心とした九州東北部では、それまで弥生時代の遺跡が希薄であった標高約200mから600mの大野川中・上流域の火山灰台地¹⁷や、標高約600mから700mの九重連山東麓の高原地帯で大規模な集落が形成されるように¹⁸なる。その本格的な出現期は弥生時代中期末から後期初頭であり、以後各地で古墳が築かれる古墳時代前期まで、継続して営まれる。

この状況は、県北の宇佐平野や中津平野とその周辺、県西部の日田盆地や玖珠盆地周辺も同様で、弥生時代後期になると遺跡が急激に増加する。その背景には、弥生時代前期に始まる稲作栽培の順調な発展と耕地面積の拡大、人口増加などが複雑に絡み合い、新しい耕作地を求めて拡散・移動したものと想定できる。

火山灰台地 こうした、拡散した集落を支えた食物生産は、沖積平野やその周辺では稲作であることが想定できる。しかし周辺に低湿地が広がる沖積地を持たない大野川中上流域の独立性の強い火山灰台地や、高原地帯 九重連山周辺の冷涼で標高の高い高原地帯では大規模で安定的な稲作栽培は困難と思われる。それでも、集落内から数量は多くないが、石包丁や鉄製の摘鎌など穀類を対象とした収穫具が出土している。そこでこうした地域で栽培された穀類については、灌漑を必要としない畑作のアワ・ヒエなどの雑穀類栽培や陸稲栽培、火山灰台地を浸食して形成された細長い谷地での水田稲作などの可能性が求められている¹⁹。

拡散・移動 大分川下流域から中流域にかけての状況を見ると、大分市雄城台遺跡や守岡遺跡・下郡遺跡群は弥生時代前期から継続的に営まれ、古墳時代前期まで続く遺跡で、この地域の拠点的な集落とも言える。一方、大分市賀来中学校遺跡・宮苑井ノ口遺跡・尼ヶ城遺跡²⁰、由布市北原遺跡・北方下角遺跡は弥生時代後期から始まる遺跡である。本書で報告する北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡も同様で、弥生時代後期から始まる遺跡であり、やはり弥生時代後期に拡散・移動の現象を見ることができる。

「黒ボク」 ところで、3遺跡が立地する地形を見ると、標高は約100mの礫層を基盤とする洪積世台地上で、地表面は黒色で軟質の「黒ボク」土壌で覆われ、周辺は急峻な斜面となっている。この地理的環境は大野川中流域の阿蘇溶結凝灰岩を基盤とする独立性の強い火山性台地に類似する。さらに、由布鉄製の摘鎌 川小学校遺跡からは、収穫具である鉄製の摘鎌や狩猟具又は武器である鉄族も数点出土しており、これも大野川中上流域の弥生時代後期集落の内容と類似している。

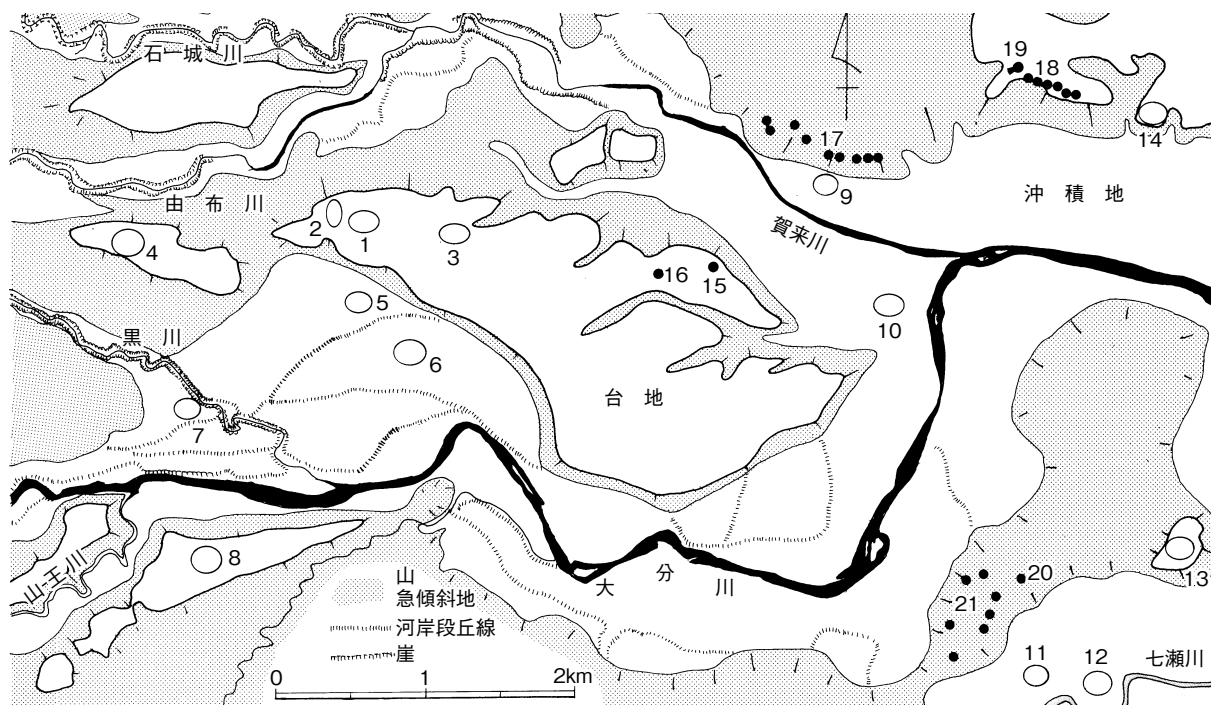
水田稲作 こうした鉄製の収穫具が出土することは、集落の周辺で水田稲作を営んでいたことを想定することができる。現在、台地上では江戸時代に開設された水路により、第121図に図示した東西に細長い低湿地とその周辺が水田化されている。しかし、現地で微地形を見ると、それ以前も台地上には西から東に傾斜する二本の低湿地があり、次第に周辺との比高差を増し、由布川小学校の東側で

合流し、谷川となっている。

水田経営 台地上での水田経営の可能性を求めるならば、この低湿地が注目されたであろう。近接し相互に関連したと想定される3遺跡は、今回の調査結果で論じるならば、由布川小学校のある微高地に、周辺の低湿地での水田経営を基盤としながら生活する最初の集落が出現する。その後、順調な水田開発が行われたと推定され、人口の増加に伴い、古墳時代前期前葉にかけて、南側低湿地を挟んで南側にも集落が拡大し、北屋敷ツル遺跡となり、さらに西に拡大し石風呂遺跡として調査した部分となったと考える。

この間に、北屋敷ツル遺跡では北側の低湿地から台地南側斜面に向けて、断面V字の集落を区切る溝が掘り込まれている。こうした弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の頃の集落を区切る溝は、周辺の雄城台遺跡・賀来中学校遺跡・下郡遺跡群・尼ヶ城遺跡などでも確認されており、沖積地・独立性台地など立地に左右されず見ることができる。さらに、北屋敷ツル遺跡では溝は、古墳時代の前期前葉の多量の土器と一緒に埋め立てられている。同様に、賀来中学校遺跡では、弥生時代後期後葉と古墳時代前期前葉の二時期の溝に、それぞれの時期の土器の大量廃棄が確認されている。さらに、同様な状況は雄城台遺跡・尼ヶ城遺跡でも弥生時代後期終末の大量土器廃棄が行われている。

墓地 ところで、この3遺跡を支えた人々のムラ、食糧生産の場はほぼ想定できたが、死後の墓地の問題がある。九州では弥生時代になると、水田稲作を開始するが、このことはより定住性を強くする。このため縄文時代は貝塚など日常の生活の範囲の中に墓地を造るが、弥生時代になると集落と墓地が完全に分離し形成される。未確認であるが、3遺跡の墓地も、洪積世台地の上の縁辺部に集団墓集落内埋葬地が造られているものと推測できる。それでも小児については集落内に埋葬される場合が多く、周宮苑井ノ口遺跡では10数基の小児甕棺が集落内で確認されている。3遺跡の調査でも、由布川



第122図 大分平野西域の弥生時代後期から古墳時代前期の集落と古墳

- 1.北屋敷ツル遺跡 2.石月呂遺跡 3.由布川小学校遺跡 4.赤野原遺跡 5.北方下角遺跡 6.下市遺跡
7.挟間中学校遺跡 8.北原遺跡 9.宮苑井ノ口遺跡 10.賀来中学校遺跡 11.ガランジ遺跡
12.植田市遺跡 13.雄城台遺跡 14.尼ヶ城遺跡 15.中尾古墳 16.中尾古墳2号 17.餅田古墳群
18.田崎古墳群 19.蓬来山古墳 20.下迫古墳 21.世利門古墳ほか

第3節 大分川中流域の弥生時代から古墳時代初頭の集落変遷

小学校遺跡と石風呂遺跡で小児甕棺墓を検出しており、同じ状況と言える。

弥生時代後期に始まる、あらゆる立地条件に適応し拡散した集落は、それぞれの場所で規模が拡大し、古墳時代前期前葉まで存続する場合が多い。この時期は、3世紀後半から5世紀にあたり、全国で前方後円墳に象徴される古墳が近畿地方を中心に築造される。こうした、前方後円墳や古墳群は大分川下流域でも築造されている²¹。

大分川の沖積運動で形成された下流域の平野は、丘陵で分断され、幾つかの小地域に分かれている。こうした各地域で、4世紀から5世紀にかけて前方後円墳を中心とした古墳が築造されている。

蓬萊山古墳 3遺跡周辺では、第122図に図示した蓬萊山古墳を中心とした古墳群がある。その立地は、大分川左岸の賀来川との合流地の地域を見下ろす丘陵上で、これらの河川に丘陵から流入する小河川で形成された低湿地が広がる。また、第1図に図示した御陵古墳²²を中心とした古墳群も、周辺に大分川の支流である七瀬川が形成した沖積地を見下ろす丘陵上に立地する。この他、さらに大分川下流

御陵古墳 成された低湿地が広がる。また、第1図に図示した御陵古墳²²を中心とした古墳群も、周辺に大分川の支流である七瀬川が形成した沖積地を見下ろす丘陵上に立地する。この他、さらに大分川下流

大臣塚古墳 の上野丘陵先端部の大臣塚古墳があり、大分川本流とそれに流入する小河川で形成された沖積地を東に見下ろす丘陵先端に築造されている。このように、大分川下流域の古墳時代前期は、小地域の有力者が前方後円墳をそれぞれの地域で築造する状況が認められる。

こうした中、3遺跡のある由布市挾間町地域は、第122図に図示したように、赤野原遺跡、挾間中学校遺跡・由布市北原遺跡・北方下角遺跡・下市遺跡など、弥生時代後期から古墳時代前期前葉にかけて存続する遺跡が点在する小地域を形成している。その一方、それらを集約しその統合形態とも言える前方後円墳の存在を確認することができず、円墳すら見出すことができない。その背景には、河岸段丘や洪積世台地で織り成す地形では、水田開発に適した低湿地が乏しく、多くの人口を支えるためには限界があったと考えられ、突出した有力者の出現に到らなかったと考える。前方後円墳を出現させる背景として、大分川流域では沖積地と河岸段丘・洪積世台地の地理的背景は大きかったものと言える。

大分県下では弥生時代後期に拡散し、規模を拡大しながら前方後円墳や古墳群を出現させた集落は、須恵器やカマド付住居が本格的に使用・構築される6世紀になると再び大きな変化を遂げる。大分平野では、弥生時代前期以来拠点的な集落として存続してきた、沖積地の中で独立性の強い台地上の雄城台遺跡や守岡遺跡、大野川中上流域や九重連山東麓の大集落などは、6世紀に居住した痕跡を認めることはほとんどできない。また、沖積地においても、弥生時代後期に始まる遺跡が6世紀以降も存続することも数少ない。この時期、集落は再び移動し、水田稲作を効率よく経営するための場所求めたと推測する。

3遺跡をはじめ、由布市挾間町の赤野原遺跡、挾間中学校遺跡・由布市北原遺跡・北方下角遺跡・下市遺跡も同様で、5世紀代でほとんどの集落がその場所から移動するためか消えてしまう。

海老毛横穴墓 それでも、この地域には海老毛横穴墓²³など横穴墓が築かれており、人々の生活は継続している。おそらく、水田経営のため台地上の集落は効率を上げるために、沖積地の集落は耕作面積を拡大するために、丘陵の裾部分など、不用地にムラを構えたものとする。

以上、3遺跡周辺での弥生時代から古墳時代にかけては、遺跡の出現や存続期間から見ると、集落景観は、少なくとも2度の画期があったと考える。最初は、弥生時代後期後葉で、沖積地での水田稲作の経験を積んだ人々が移動したためか、洪積世台地や河岸段丘上に遺跡が出現する時期である。そして2度目はこうした地理的条件の上に成立していた集落が消える5世紀台である。こうした現象は、大分県内では共通する現象であり、その背景には、水田稲作の発展と耕地の拡大、効率的な水田経営、人口増加、さらには社会的な変革、支配層からの圧力など複雑な要因を想定することができる。

註

- 1 挾間町教育委員会「北原遺跡」1994
- 2 挾間町教育委員会「北方下角遺跡」1997
- 3 大分市教育委員会「賀来中学校遺跡」1992
- 4 大分県教育庁埋蔵文化財センター「賀来西遺跡・宮苑井ノ口遺跡」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第4集 2005
- 5 大分県教育委員会「穂田市遺跡」1994
- 6 大分県教育委員会「雄城台－第8次発掘調査の概要」1987
1972年から1994年にかけて県立高校建設・増築に伴い9次にわたる発掘調査
- 7 大分県教育委員会「馬姓遺跡・北ノ後遺跡・乙院屋敷遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（13）1999
- 8 大分県教育庁埋蔵文化財センター「田室東遺跡」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第27集 2008
大分市教育委員会「東田室遺跡 2」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第55集 2005
- 9 大分市教育委員会「守岡遺跡－昭和50・51年度発掘調査概報」1979
- 10 大分市教育委員会「下郡遺跡群Ⅰ～Ⅷ」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 2000～2010
1987年から2004年にかけて区画整理事業に伴い143次にわたる発掘調査
- 11 大分市教育委員会「羽田遺跡」1993
- 12 大分県教育委員会「荏隈杉下遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（11） 1999
- 13 大分県教育委員会「玉沢地区条里跡遺跡群」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（12） 1999
- 14 大分県教育委員会「下黒野遺跡」1973
- 15 大分県教育委員会「下郡桑苗遺跡」大分県文化財調査報告書(13) 1989
- 16 大分市教育委員会「城南遺跡」1993
- 17 1976年から大野川中上流域の圃場整備事業・畑地帯総合整備事業に伴い発掘調査を実施し、弥生時代後期を中心とする大集落を確認。荻町教育委員会「荻台地の遺跡」・竹田市教育委員会「菅生台地の遺跡」大野町教育委員会「大野原の遺跡」・野津町教育委員会「野津川流域の遺跡」の他、各旧市町村から報告書が刊行されている。
- 18 久住町教育委員会・大分県教育委員会「都野原田遺跡」2001
- 19 大野町教育委員会「大野原の遺跡」1980ほか
- 20 尼ヶ城遺跡 1978年大分市教育委員会が宅地造成に伴い調査
- 21 大分県教育委員会「大分の前方後円墳」大分県文化財調査報告書第100輯 1998
大分市史編さん委員会「大分市史 上 自然 先史・原史 古代」 1987
- 22 大分県教育委員会「昭和43年度緊急発掘調査概要－御陵古墳とその周辺－」1969
大分県教育委員会「御陵古墳緊急発掘調査」1972
- 23 挾間町誌編集委員会「挾間町誌」1984